

令和3年12月3日

## 京口門だより No.98

気候の不順と新型コロナウイルス感染症に気を取られているうちに、早や師走となってきました。わが国は現在のところ感染者数は少なくなっていますが、オミクロン株というウィルスが発生して、なかなか気を許すわけにはいかないようです。「うき事はしらじ師走の鳶鳥」(栲良)

最近ではテレビや新聞・雑誌の広告でも、ナニナニに効く漢方薬という宣伝が目につきます。宣伝広告ですからあまり目くじらを立ててアレコレ言うのも気が重いのですが、そのような文言が繰り返されると、あの漢方薬はそんなものかと人々の頭に刷り込まれていくのかと思うと残念です。

たとえば、コムラ返りには芍薬甘草湯(芍甘湯)が良く効くというのがありますが、確かに効果があることはそうなのですが、コムラ返りには芍甘湯以外の漢方薬は使われないのか、あるいは芍甘湯はコムラ返りにしか使えないのか、というような素朴な疑問がおきてきます。

芍甘湯は「足が温かくて、脚が痙攣して引きつれるのに効果がある」と漢方の医書には書かれてあります。ですからコムラ返りの脚の痙攣に使うことは間違いではないのですが、漢方の世界ではむしろ内臓の筋肉の痙攣や痛みによく使われてきました。たとえば胆石の痛みや尿路結石の痛みにも、また他の薬方と組み合わせて腸の痛みをとまなう病気などにも使います。また附子という温め鎮痛作用のある薬を加えると、腰痛や坐骨神経痛にも使われます。たいへん応用範囲の広い漢方薬なのです。

面白いことに、芍甘湯は芍薬と甘草という二つの生薬からできている薬方で、動物実験でウサギの腸管にそれぞれを作用させますと、芍薬は腸管を収縮させ、甘草は逆に緩める作用があることがわかり、二つ合わせて腸管に作用させると、腸管の痙攣を抑える作用があることがわかりました。全く逆の働きをもつ薬を組み合わせて成り立っているところが、実に漢方薬らしい薬です。

漢方薬というものは複雑な働きの組み合わせから成っている薬で、それだけに多様な作用を持った奥深い薬剤でもあります。

